

日本台湾学会 ニュースレター

第15号

2008年10月

<目次>

- 特集 小島朋之先生追悼文集 1
特集 設立10周年記念学術大会を振り返って 3
学会・シンポジウム等参加記 14
台湾研究関連情報 17
日本台湾学会活動報告 20

特 集

小島朋之先生追悼文集

日本の中国・台湾研究に多大な貢献をされた小島朋之先生（慶応大学教授）が2008年3月4日にご逝去されました。会員から追悼文が寄せられました。ここに掲載して、小島先生のご冥福をお祈りいたします。

（掲載順序は原稿の受領順です。）

「記者喜ばせ」の人 岡田充（共同通信）

「記者泣かせ」という言葉がある。何を質問してもこちらの思いが伝わらず、見出しにとれるキーワードも見つからない。そんな時はインタビュ

ーの相手に責任を押しつけ「記者泣かせ」と、勝手にレッテルを貼るのが新聞記者である。

小島朋之さんはその対極にいた。最初にお会いしたのは天安門事件直後の台北。日台の識者が東アジア情勢と日台関係を議論する第1回「アジア・オープン・フォーラム」のレセプション会場だったと思う。京都の大学にお勤めだったが、少壮の中国研究者として雑誌などで頭角を現していた。話しているとすぐ、質問の意を汲んで当意即妙に答える。歯切れが良くゆっくりと話してくれるのでメモがとりやすい。こちらのバカげた質問にも根気よく付き合い、えらぶた態度はみじんも出さない。その姿勢はずっと変わらなかったと思う。

1996年の台湾海峡の緊張をはじめ、2000年の台湾政権交代、05年の「反日デモ」など、節目のたびに共同通信の座談会出席や寄稿をお願いした。座談会のメモを整理してみると、小島さんの発言は当を得ていて、見出しになりやすいキーワードがすぐ見つかる。「記者喜ばせ」の人だ。

銀座の割烹料理屋で待ち合わせたのは昨年初めだった。約束の時間はとうにすぎている。携帯電話から「今タクシーで向かっているのだが、どの辺ですか」と聞かれる。事前に伝えた住所とは全く別の方向を走っている。銀座を何周か回って着いたのは1時間後。日中歴史共同研究に関するインタビューの日取りを決めたが、間もなく入院されたことを知った。

インタビューは6月末に実現した。三田の研究室棟に、すこし顔が腫れやつれた老人がわたしに

声をかけた。その老人が小島さんと分かって息をのんだ。8月には台湾関係のフォーラムでお会した。「来週から中国です」と、たばこをくゆらせながらビールをうまそうに飲んでいた。すっかり回復されたとはばかり思い込んでいたのだが。

インタビューの最後に思い切って「病気のことで書いてもよろしいですか」と聞くと、わずかに逡巡したようにみえたが押し切った。紙面を飾った写真はカメラマンの腕が良かったせいか出来栄がよく、小島さんも喜んでいて。最後の部分を引用して筆を置く。

「ことし二月、病院で検査したら、前頭葉の裏に直系三センチ大の腫瘍が見つかり手術しました。一月で退院し、四月から復帰しています。これカツラなんです。だいが生きてきましたが、まだ外せないなあ。学部長を六年務めて休む暇がなかったけれど、おかげでゆっくり休めました」。

小島朋之先生と台湾 福田円（東海大学）

2007年冬に小島朋之先生が緊急入院された時、信じたくないと思う反面、ここ数年は特にお忙しく、急にお歳を召されたような先生のお姿も思い出され、いたたまれない気持ちになった。私は05年から台湾に留学していたが、先生は折に触れお手紙やお電話で留学生生活を励ましてくださり、台北や東京でお会いする折には、博士論文や将来のことについて親身になってご助言をくださった。

小島先生は現代中国政治と東アジア論をご専門とされ、その中で台湾の政治社会、とりわけ民主化と「台湾認同」の行方に強い関心を持っておられた。毎年、現代中国論の授業では、台湾の民主化と中台関係について講義なされ、02年と06年には台湾でのゼミ合宿も行った。台湾でのシンポジウムや学術会議に積極的に参加され、日本の論壇でも、台湾における民主化の成果と中台関係の複雑性について解説し、日本がその行方に関心を持ち続けることの重要性を主張されてきた。

そのような先生と台湾の関わりとして忘れ難い出来事は、私がお世話になった近年だけでも幾つかある。台湾学会第6回学術大会では、「2004年総統選挙分析」分科会で座長をなされた。総統選挙前日の銃撃事件とその余波について生き生きと語られた先生のお姿は忘れることができない。06年にゼミ合宿を行った台湾は「倒扁」運動の最中であつた。街頭デモの様子に興奮なされた先生は、

学生のことも忘れ、「倒扁」運動の中に消えて行かれた。その直後、総統府で施明德と陳水扁が並んで写る写真を発見し、感慨深げに見つめておられた先生のお姿も忘れることができない。もしも今もご健在であれば、先生は08年選挙と国民党政権の復活をどのようにご覧になったのだろうか。

2007年の夏、一度目の入院より退院なされた小島先生は、何かに突き動かされるかのように中国、台湾の各地を訪問された。7月初旬に淡江大学での「香港一国両制十周年」国際学術会議に参加された際、先生は珍しく他にご予約を入れず、「美味しいものを食べ、台北の街を見たい」とおっしゃった。しかし、既に真夏であつた台北では体力の消耗が激しく、街へ出かけることは叶わなかつた。その時、「先生はもしかしたら台湾にお別れを言いに来られたのかもしれない」との考えも頭を過ぎつたが、私はすぐにそれを打ち消した。あまりにも速すぎたご病状の悪化には、先生ご自身が最も心残りであり、今も天国から中国と台湾を観察し、分析していらっしゃることであろう。そのような先生とこれからも対話を続けながら、ご学恩に少しでも報いることができればと思う。

小島朋之先生と台湾と私 松田康博（東京大学）

小島朋之先生が亡くなられた。あまりにショックであるが、これは事実である。私は小島先生の薫陶を受けた愛弟子ではない。それでも、先生は私にとって大きな目標であつた。そして何よりも先生は私の運命を変えた大恩人であつた。

小島先生は業績ゼロの私を、在香港総領事館の専門調査員にご推薦してくださった。そのおかげで私は1994年から2年あまり、香港に滞在した。当時私がいた職場は台湾出張が禁じられていたが、香港からならいくらでも行けた。小島先生がおられなければ、私が台湾研究で博論を書くことは決してなかつたであらう。

2004年の春、台北での国際会議でご一緒した際には、職場の研究環境で悩んでいた私に、転職先を紹介してくださった。結局その話はうまくいかなかったが、その過程で私は先生のアドバイスに従い、東アジア研究者への変身を図つた。この変身は、意図せざる結果として今の職場への転職につながつたのである。

小島先生と台湾との関わりでは、苦い思い出がある。2002年に慶応義塾大学のある学生サークル

が李登輝前総統を三田祭に招待することを大学と相談もなく決め、公表した。当時総合政策学部長だった小島先生は、この問題処理の矢面に立たされた。

この時、先生は「李登輝さんを日本にお呼びしようという動きがあれば、今でも私はそれを公に支持するよ。しかし、今回の学生たちのやり方では、できることもできなくなる」と言っておられた。李登輝訪日には様々な障害があり、高度な判断力と慎重かつ十分な準備が必要である。そもそも障害があるからこそ訪日が台湾の「外交突破」になるのではないかと。

その後一部の人々から小島先生に加えられた批判には、正直気が滅入った。台湾に理解があり、日台関係を大切にしたい小島先生のような方を、何も分からぬ学生が勝手にぶち上げた李登輝訪日のために喜んで自爆しなかったという理由で、容赦なく切って捨てる風潮が一部にあったことは、残念でならず、小さからぬ義憤を覚えた。

ところが、先生ご自身は、まったくくげなかった。むしろ積極的に台湾に関わっていかれた。2004年の日本台湾学会学術大会では、総統選挙分科会の座長をご快諾くださり、最後にご自分の言葉で締めくくっていただいた。またある日台交流事業で、日本側の代表を引き受けていただき、対等な交流のため日本で資金集めもされた。小島先生にとって、日台関係は東アジアの不可欠の一部であり、それは日中関係とも共存すべきものであった。日・米・中・台それぞれの相互関係が「多贏」になる時代を見通しておられたのである。

それにしても、小島先生は真剣に頼めば何でも引き受けてくださる頼りがいのある偉大な先輩であった。こうして筆を執り、あの慈愛に満ちたお顔を思い浮かべると涙が止まらない。先生にとって台湾との関わりが総じて愉快なものであったことを信じて、ご冥福をお祈りするのみである。

特 集

設立 10 周年記念学術大会 を振り返って

2008年5月31日・6月1日に日本台湾学会の
記念すべき第10回学術大会が東京大学駒場キャン

パスで開催された。本号では、学術大会の様子を特集として掲載します。分科会については、例年通り企画責任者（自由論題は座長）の方に内容や討論の概要を執筆していただきました。

設立十周年記念学術大会までの軌跡 実行委員長 若林正文（東京大学）

日本台湾学会第10回学術大会は、設立10周年の記念の大会として、去る5月31日午後から翌6月1日全日の1日半の日程で、東京大学駒場キャンパスで開催され、無事終了した。1日目には「台湾研究この10年、これからの10年」と題するパネルディスカッションと李遠哲前中央研究院院長の記念講演が行われた。2日目は全11の分科会がもたれた。参加者総数は招待者も含めて延べ227名、懇親会には同様に125名が出席した。まずは盛会であった。実行委員の皆さん、春山理事長はじめ常任理事の皆さんやその他の皆さんのご尽力・ご協力、交流協会の後援に感謝したい。近年のキャンパスの情報化に伴い施設の利用規則がうるさくなっており飲食などご不便を感じた会員もおられたと思うがご寛恕を御願したい。

日本台湾学会は、1998年5月30日東大本郷キャンパス法文二号館の教室で設立大会と記念シンポジウム「“台湾研究”とは何か？」を開催して産声をあげた。その翌年の第1回から第3回大会まで藤井省三会員の骨折りで連続して同キャンパスの山上会館を借り切って開催、これにより学会の基礎を築き、そして第4回の名古屋国際会議場での大会でようやく東大の外に出ることができた。その後、第5回は関西大学、第6回には一度山上会館に戻ったが、第7回は天理大学、第8回は一橋大学、第9回はアジア経済研究所と続いた。当初は在京常任理事が実行委員を兼ねて運営していたが、第4回からは他の学会並みに「当番校」＋実行委員会方式による運営ができるようになっていたわけである。

私は臨時理事会も含めて最初の5年間理事長を務めたが、自分の勤務するキャンパスでは大会が行われたことがなかったため、一度は駒場キャンパスに会員の皆さんをお迎えしたいと思っていた。そこで第9回大会を前に常任理事会にはかり駒場キャンパスでの第10回大会開催を承認していただいた次第であった。川島会員が北海道大学から転勤し同じキャンパスの同僚となっていたことも心強かった。

事実、私は実行委員長なのであるが、準備・運営に八面六臂の活躍をしたのは副委員長を務めた川島会員であって、私を取り仕切ったといえるのは前記パネルディスカッションくらいのものである。それもやったことは、前記のテーマ設定とパネラーに「今後の10年若手のターゲットになる人」という基準を設けて各方面に推薦を募り御願いをただけで、特に内容に立ち入った打ち合わせもしなかった。にもかかわらず、巧まざる結果として熱気ある内容充実した討論ができたのは、やはりこの間の台湾研究そのものの充実を反映しているものと言えるだろう。討論の内容は松金担当理事の編集で次号の『日本台湾学会報』に掲載されるので、楽しみにしていただきたい。

ただ、このパネルディスカッションで明らかになった反省点もある。学術大会当日の学際的交流のあり方を考え直してもよいのではないかということである。これまでは、そのような場として記念講演を想定していたわけであるが、これからは必ずしもこの形ではなく何らかの学際的討論を行いやすいテーマを設定してパネルディスカッションを行うという形式も考えるべしとの提案が常任理事会に寄せられている。私としてもこの方向で運営が多様化することを期待したい。

最後に、この10年間で本学会は、台湾研究の大先輩である劉進慶、凜彦彦の両氏、そして石田浩元理事長を失った。これらの人々と10周年を迎えられなかったことは残念でならない。

<10周年記念シンポジウム>

「台湾研究この10年、これからの10年」

滝田豪（大阪国際大学）

シンポジウムではまず春山明哲理事長（早稲田大学）と下村作次郎前理事長（天理大学）の基調報告が行われた。本学会の10年間を振り返った春山氏は、過去の『日本台湾学会報』と『報告者論文集』に掲載された233本もの論文全てを主題ごとに分類した。下村氏の報告では、関西地域における台湾研究の歴史が、台湾史研究会・天理台湾学会・台湾文学研究会に集った研究者の個人名が続き具体的に「顔」が見える形で綴られた。

引き続いて行われたパネルディスカッションでは、川島真氏（東京大学）の司会のもと、政治・経済・社会・文学・歴史の各分野を代表する形で5名のパネリストが報告を行った。

政治分野は、松田康博氏（東京大学）が「台湾政治研究はどこから来て、どこへ向かうか？—これまでの十年、これからの十年」と題して報告した。台湾政治研究では第一に「情報化」が進み、たとえば民主化の影響で、かつては考えられなかったような貴重な資料が数多く流通するようになった。第二に「学際化」が進み、たとえば台湾政治研究は東アジア国際関係の一部として行われる傾向が強まった。第三に「政治化」が進み、とりわけ台湾の研究者の政治的な色分けが目につくようになった。そしてこれからの日本の研究者は、もはや細かな実証研究では情報面で圧倒的な優位に立つ台湾の研究者に伍すことは困難であることから、学際性・領域際性を強めてクリエイティブな研究を行うべきということが一つの方向性として示された（現地の研究者の優位性については、下村氏の基調報告でも原住民自身が行うようになった原住民研究という文脈で触れられていた）。

経済分野を担当した佐藤幸人氏（アジア経済研究所）は、10年前の創設大会における同様のシンポジウムと今回との両方で報告を行った唯一のパネリストであった。今回のタイトルは「台湾経済研究における課題とアプローチの変化」である。90年代以後の台湾経済研究は80年代以前から変化した。かつては高度成長のメカニズムの解明を目的としたマクロな研究が多かったが（そこでは韓国など他国との比較や発展の遅れた国への応用が念頭に置かれていた）、近年では台湾経済の独自性の解明を目的とするミクロな研究が多くなった。その背景には、経済成長の結果すでに先進国に準ずる地点にまで到達しており、かつ経済成長率が低下したことなどがあつた。また新しいアプローチとして「資源・能力アプローチ」、「集積あるいはクラスターからの研究」、「国際価値連鎖」、「アーキテクチャ論」、そして佐藤氏自身の方向性として「行為システム・アプローチ」が紹介された。そして今後の研究課題として「キャッチアップの天井」が示された。台湾経済がいずれは先進国のレベルに達するかということそうではないという指摘は興味深かった。

「台湾研究、この十年、これからの十年：社会」と題して報告した三尾祐子氏（東京外国語大学）は、主に文化人類学のレビューを行った。文化人類学的研究において顕著なのは、日本植民地期についての関心が高いことである。まず当時の研究資料の発掘と整理が進んだ。また日本時代になされた研究に対して、植民地主義との関係などからの再検討が進んだ。さらに、そうした過去の資料

や研究をとらえるために欠かせない作業として、台湾における「日本」に対する歴史認識についての研究も行われた。また近年では、現代の社会問題や政治問題に直接関係するような「生々しい」問題を扱う研究も現れているという。最後に今後の研究課題として、都市研究、台湾から／への移住などが示された。

文学については、星名宏修氏（琉球大学）が「台湾文学研究、この10年、これからの10年」と題して報告した。台湾で初めて大学に台湾文学系が設置されたのは11年前の97年であったが、その後台湾における台湾文学研究は急速に発展し、これは「静かな革命」と呼ばれている。近年の動向として重要なのは05年の成功大学の研討会がテーマとした「跨領域」、つまり学際性である。すでに中文系や歴史系の出身者以外に、外文系・日文系・社会系・メディア系の出身者が多く参入していたが、さらに社会学や心理学との対話をも目指したのがこの研討会だった。星名氏によればまさにその学際性こそが台湾文学研究の魅力だという。また基本史料の整理も進み、これが今後の研究を「根本から変えていく」という。

これらの報告の共通点として重要なのは、川島氏が最後にまとめられたように、過去10年で情報化と学際化が急進したという指摘であろう。これは本学会ではとくに学際化への対応が十分ではなかったという認識につながる。それを目的の一つとして設立されたにもかかわらず、である。

紹介の順番が前後したが、この点を鋭く突いたのが、歴史分野を代表した駒込武氏（京都大学）の報告であった。タイトルは「台湾史研究の動向と課題—学際的な台湾研究のために—」である。駒込氏は各パネリストの過去の研究まで渉猟し、議論の出発点として独自の問題意識を設定し、それを土台に各氏に疑義を投げかけたのである。本人は「後出しじゃんけん」と自ら揶揄したが、その語調とは裏腹に挑発的な報告であった。その問題意識とは「『現実に台湾に住む人々』の経験から発すること」で、具体的には日本時代から228事件後にかけて農民組合や中国共産党に関与し「白色テロ」で銃殺された活動家の簡吉と、その息子でアメリカに留学し帰国後創業したコンピュータ企業を世界最大のマザーボードメーカーに育て上げた企業家の簡明仁という、対照的な父子が取り上げられた。

駒込氏の“挑発”の概要は次の通りである。松田氏は著書において国民党が「半山」以外の本省人政治エリートを取り込んだことに着目しながら、

「半山」ならぬ共産党関係者として最後まで抵抗を続けた簡吉などを無視している。佐藤氏は著書において簡明仁の「台湾のために貢献したい」というナショナリズムを指摘しながら、父を白色テロで失いエリートコースから排除された本省人としてのナショナリズムの複雑性を無視している。星名氏は論文において「楊逵が抗日の姿勢を崩さなかった」という通説を否定しながらそれが崩れていったプロセスに目を向けず、簡吉も含む当時の台湾人が支配者の言語である日本語を使用せざるを得なかったことの「絶望感のようなもの」を無視している。そして三尾氏は論文で、近年の日本の研究者が『民族台湾』を植民地主義的と批判していることに対して加害者と被害者という単純な二分法によって『民族台湾』の真の価値をとらえていないと反批判を行いながら、植民地支配の暴力性に対する認識が弱い。

フロアからは下村氏と塚本元氏が発言した。10年前の創設大会で中華民国史との関係を報告された塚本氏が今回その分野の報告がなかったことを指摘されたときには虚を突かれた思いであった。

ところで、今回のパネリストは、総合司会の若林正文氏（東京大学）によれば、「これからの10年」の間に若手研究者の「ターゲット」となるべき人物であるとのことだった。それでは、10年後には誰がどのような報告を行うのだろうか、そんな“ミーハー”な感想を最後に付け加えて、シンポジウムの紹介を終えたい。

<記念講演>

李遠哲博士（台湾・中央研究院前院長）
「私の学問、私の人生」



ご講演中の李遠哲博士

李遠哲博士をお迎えして 日本台湾学会理事長 春山明哲

設立 10 周年を迎える学会の記念講演には台湾の学術と知性を代表する人を、というわけで、理事長に就任したわたしの最初の大仕事が李博士の招聘でした。ここでは招聘から講演にいたる「楽屋裏」を語りながら、李博士の「素顔」の魅力の一端を皆様にご紹介することにしましょう。なお、博士の記念講演の記録は『日本台湾学会報』に掲載の予定です。そちらをご覧ください。

中央研究院に博士をお尋ねしたのは 2007 年 7 月のはじめで、同行いただいた淡江大学日本研究所長の任耀廷さんとわたしは、広く明るい眺めの良いオフィスに通されました。李博士は静かな物腰でくつろいだ感じで話されましたので、わたしもすぐにリラックスできたのですが、印象的だったのは博士が日本植民地下の台湾で小学校 3 年まで過ごした時代について語られたことです。博士の「人生」それも少年時代から語っていただこう、という考えはここから浮かびました。招聘については快諾をえたものの心配はスケジュールで、日程表を繰りながらの「その頃は、日本に行けますね」との博士の言葉を聞いて、この件には「ツキがある」と感じました。

李博士は柔らかな美しい日本語を話されますが、講演原稿は中国語でしたので三人の会員に翻訳をお願いしました(ありがとうございました)。博士は成田の飛行場に到着してからホテルまでの車中でも、わたしの意見を聞きながら、原稿を丹念に推敲されていました。到着の晩は、台北駐日経済文化代表処の許世楷代表主催で、博士の日本における友人達の集いがあり、ノーベル賞受賞者の小柴昌俊さんや宇宙飛行士の毛利衛さんなどが博士を囲んで楽しく語り合っていました。これも博士のお人柄なのでしょう。

講演当日、博士は早めに到着され、台湾研究に関する記念シンポジウムを傍聴されました。「熱心な討論で、嬉しいですね。」とは博士の感想です。懇親会では予定をオーバーして終了間際まで談笑されていました。東大駒場の正門で車から手を振っている博士の姿を目に追って、私は今回の「大仕事」が成功裏に終わったことを感じました。なお、6 月 21 日付けの『朝日新聞』夕刊の「ぴーぷる」欄が博士の講演を写真入りで報じています。今回の李遠哲博士の招聘については、交流協会及び代表処の皆様は大変お世話になりました。とりわけ科学技術部の呉悦榮さんには事務連絡と接遇

のすべてに協力いただきました。この場を借りて、ご協力ご尽力いただいたすべての皆様に、心から厚くお礼申し上げたいと思います。

李遠哲博士の講演を拝聴して 近藤正己 (近畿大学)

本学会設立十周年記念大会の記念講演にふさわしく、台湾の学術を代表する学者を招待したいという熱意から、春山理事長自身が台湾を訪問してノーベル賞受賞者である李遠哲氏を招聘した、という経緯が講演に先立って紹介された。

1936 年に新竹で生まれた李遠哲氏は、母が勤務していた幼稚園に居住し、腕白な幼児期を送った。小学校に入学した頃には戦争が本格化し、B29 から投下された爆弾は学校に設置された軍の司令部や、自宅から 50 メートルほどの場所にも落ちたため、山間部にあった小作人の家に疎開することになった。こうして、山の麓に水を汲み、野菜を作り、魚や果物をとる疎開生活が始まった。この 2 年間、学校には行けなかったものの、大自然のなかで自活するすばらしさを実感した。



記念講演会の様子

戦後、日本人が帰国し、国軍や三民主義が台湾に入り、社会変動に大きな衝撃を受けた。学校生活に戻ると、公学校へ行ったことがなく日本語しかできなかったため、同級生からは「三本脚」といわれ、石を投げつけられた。3ヶ月ほどで台湾語をマスターし、中国語も 5 年生になると簡単な本が読めるようになり、やがて上海で出版された

『開明少年』などの月刊雑誌によって戦後の世界状況を知ることになった。その一方で、野球の厳しい練習にも耐え、6年生になると卓球の選手として新竹県代表として優勝するなど、運動に明け暮れた。

新竹中学は募集人数が100人で競争が激しく、口頭試験では将来の希望を聞かれ、模範解答が「大統領になること」であることは自覚していたが、あえて「科学者になりたい」と回答した。入学後には課外活動にいそしみ、演劇、野球、テニスのほか、学生自治会にも関わり、帰宅するのはいつも夕闇が迫ってからであった。級友が進学勉強を始めると、ガリ版を刷って物理のプリントを同級生に提供したが、教えることによって大きく学ぶことができた。

推薦で入学した高校では、トロンボーンを吹いたり、魚類の解剖図を描いたり、青年団にも参加し、体力や気力で何でもできると思っていた時期だった。だが、多忙がたたり1カ月の自宅静養となったことは大きなショックだった。この休学は、挫折感を覚えただけでなく、人生とは何であるのかを考える契機となった。限りある命のすばらしさと、人生の主人公がとりもなおさず自分自身であることを知り、これからはむやみに飛び回るのを止め、意味のある有意義な生活を送り、社会や国家に役立つ人物になることを心がけるようにした。物理の授業のとき、ジープで駆け付けた憲兵が校舎を取り囲み、泣き叫ぶ友人が学校から軍に連行される事件が起きた。思想問題に絡むこの事件はこの社会が恐怖に満ちていることを実感させたばかりか、あるべき社会が合理的であること、またそうした社会をめざす必要性を認識させた。

推薦入学で入った台湾大学では、有機化学を学ぶことと、同志と社会改造にあたることの2つを理想に掲げた。白色テロの時代、開館から夜の10時まで図書館でドストエフスキーやゴーリキーなどのロシア文学を日本語で読み社会と人間関係を考え、岩波新書を読みふけて新しい世界の空気を吸い込んだ。こうして反共の時代でも、唯物論的弁証法も知ることができた。また、化学を学ぶために必要なドイツ語、ロシア語も学び、卒論はストロンチウムの分離について書いた。

留学したアメリカでは、指導教授は私が直面していた質問には直接的には答えてくれず、「研究で何がわかったのか」、「次に何を研究したいのか」と学問の枠組みづくりと、主体的な取り組み方を促すだけだった。また、学生を研究者として遇する指導教授の態度にも感銘し、こうしたことから

学問の真理の重要性を感じると同時に、学問を一生の仕事とする決意が生まれ、イオンと分子の研究に没頭するようになった。1989年にはノーベル化学賞を受賞したが、1994年に優秀な研究者を育成することと、私たちの社会を変革したいという2つの理想をもって台湾へもどり、中央研究院院長に就任した。環境問題の出現のように、無限から有限に転じた21世紀は人類の危機的状況を露呈し、その一方で富の分配からみて、ますます不平等な社会に進みつつある。ナショナルな問題を克服するために地球が1つの社会であることを認識し、いまだ道半ばのグローバリゼーション化に対して人類は個々の欲望を抑え、生活をできるだけシンプルに徹する必要がある、と話を結ばれた。

ところで、我が家においては、妻の実家が李家と姻戚関係をもっているということで、「李遠哲」は夫婦喧嘩のさいのワイルド・カードとして使用されてきた経緯があるため、私は苦い思いしかなかった。だが、自らの生い立ちを台湾社会との関わりによって語る李遠哲氏の語り口は、戦中・戦後の台湾史を聴いているようで、若輩者の台湾研究者にとってはありがたかった。李遠哲氏は、台湾人として国民党下の学校教育を受ける最初の世代であるが、文武両道や自由を尊ぶ雰囲気を守りながら学生生活を送り、白色テロの時代を生き抜いたこと、自らの学問研究の深化、及びそれを台湾の社会変革に活かそうというくだりは、ことさらに感銘を受けた。

<分科会報告>

第1分科会

「文学から見た台湾の記憶／記憶の台湾
—1930年代を中心に—」

企画責任者：李文茹（台湾・慈濟大学）

座長：呉佩珍（台湾・国立政治大学）

本企画は文学という想像力のフィルターを通して、植民地台湾の記憶はどのように再編成されるのかを1930年代をキーワードにしながら問題化した。具体的には戦前、戦後について各二本の発表があり、それぞれは事例研究を行った。発表全体としてはモダニズム、ジェンダー、エスニシティなどと複雑に交錯するコロニアル／ポストコロニアルな問題を検討し、1930年代という横断的な

共時性から植民地記憶を語る営為の中に潜在する諸力学を浮き彫りにすることを試みた。また午前と午後の両セッションはそれぞれ垂水千恵氏と川口隆行氏をコメンテーターとして迎えた。

午前の部においては戦前の作品が対象となった。Rober Tierney 氏「Narrating the Musha Incident」と呉亦昕氏「彼らの「東京」—1930年代台湾新文学のなかの東京」は、それぞれ日本人作家と台湾人作家の作品をもって1930年代当時の日本文壇における〈台湾〉表象を考察した。異国趣味や植民地という制限から脱出し、文明・モダンの記号となる「帝都」に集中して創作活動を行おうとした「フオルモサ」世代による作品と、植民地にもたらされる「文明化」を疑問視する中村地平と大鹿卓の作品は、きわめて対照的であり、1930年代日本における台湾表象をパラレルに考察するうえで重要なものであろう。

文明と野蠻に着目した Tierney 氏の発表に対して、コメンテーターの垂水氏は台湾原住民の表象は1930年代に定着されたとし、それ以前と以後との相違について質問をした。それに対して発表者はフロイトの『文明への不満』に触れながら、プリミティブへの憧憬を文明化する過程に生じたジレンマに起因していると応答した。また新感覚派と郷土文学のあいだに揺らぐ台湾人文学青年による「異種混合的」なテキストに焦点を当てた呉(亦)氏の発表について、垂水氏は同時期の日本文壇におけるルンペン文学ブームと左翼文学との関連性を把握する必要性から触発的な見解を述べた。

午後の部では戦後の言説が中心となった。李文茹氏「集団的記憶の連続と断絶—戦後の霧社事件の関連作品をめぐって」と呉佩珍氏「なぜ、今、女性作家は三〇年代を書くか?—日台女性作家による植民地台湾の記憶の再編制」は、日本人作家と台湾人作家それぞれが持つ〈植民地台湾〉の記憶をめぐって、いかに共有し、いかに断裂しているのかについて考察した。李は、植民地体験の坂口れい子と植民地未体験の稲垣真美、その両者による「霧社事件」関連言説を比較しながら、集団記憶としての霧社事件はいかにトラウマを含める個人的体験と重ね合いながら作品化されたのかを分析したうえで、日台断交までの植民地的な「和解」の可能性はいかに模索されたのかを提示した。2000年以降の言説に注目する呉の発表は、台湾人女性作家『海神家族』(陳玉慧、2004)と日本人女性作家『あまりに野蛮な』(津島佑子、2007)を軸として、異なる場所、体験を有する女性作家が同

じく霧社事件に触れながら植民地台湾の記憶を物語化する意味について問題提起をした。

以上の二本の発表に対し、川口氏はまず戦後、霧社事件をめぐる解釈は日本においても台湾においても文学という範疇内で繰り返されていることが再確認できたと指摘した。現時点において支配と被支配の境はもはや従来のナショナリティの枠内で論じるのが不可能となり、さらにポストコロニアル時代の到来につれて、権力が解体／再分配される一方、支配と被支配の関係もさらに曖昧となる。それらが背景となるなか、繰り返される小説というジャンルによる霧社事件の表象は、事件の複雑で多様な様相を呈示していると考えられる。

物語によって記録された歴史的、集団的な記憶は取捨選択の結果を表すものであれば、書かれたものは無数の零となる歴史的記憶に支えられるものとなる。1930年代にまつわる言説を、戦前から戦後にかけての通時的観点から考察した今回の企画は、史的記憶／植民地記憶における連続と断絶の一部を明らかにしたと思われる。しかしながら、企画者として欲張ったことを言うならば、戦後という長いスパンでコロニアル言説を考察する際、日台関係の枠内で語り切れない部分、たとえば東アジア規模での冷戦体制との関わりをも視野に入れた検討が必要だと思われる。今後の課題とした。

第2分科会

『「ポスト1958」の中台関係—攻撃の「挫折」か「回避」か?』 企画責任者：伊藤剛(明治大学) 座長：伊藤剛(明治大学)

本学会は、『「ポスト1958」の中台関係—攻撃の『挫折』か『回避』か?』というタイトルで開催され、当初は15名ほど、部会終了時には25名ほどの会員が参加した。中台の危機状況は、金門・馬祖への武力攻撃が如実に現れた1950年代以降、結果的には軍事的な危機を迎えることなく推移している。しかし、それを攻撃の「挫折」と見るのか、「回避」と見るのかで、国際政治の意味は大きく異なってくるというのが、本学会申請時の問題関心であった。

報告は、最初に石川誠人会員(立教大学)が「1962年国府の『大陸反攻』計画の立案とその挫折—主に対米関係の視点から」というタイトルで行った。大躍進政策に伴って生じた中国の混乱に乗じて蔣

介石は大陸反抗を試みたが、それは反攻拠点を計画すると同時に、背後での民衆蜂起を構想したものであった。しかし、1958年の「蒋介石・ダレス共同声明」に則り、「現状維持」を旨とするケネディ政権から支持を得られなかったこともあって、「大陸反攻」を「断念」したのであるが、それは同時に将来的な「反攻」への期待をも残すものであったことが述べられた。次に、福田円会員（東海大学）が「中国の台湾政策（1962年）—福建省軍事動員と『危機』の回避」というタイトルで報告を行った。中国側から1962年に蒋介石が企てた大陸反攻計画を見れば、一方で福建省に解放軍を集結させるような政策を実施したものの、むしろ蒋介石率いる「旧中国」の「罪行」を「告発」するために大陸反攻が利用された。その結果、アメリカによって大陸反攻不支持表明が出されると、「台湾解放」政策を掲げながらも、戦争には当面従事しないとする「現状維持」が確保され、その意味でも中国の利益は、アメリカのそれに適うものになっていったという内容であった。

討論者として、佐橋亮会員（東京大学）と、高木誠一郎会員（青山学院大学）に登壇をお願いしたが、ケネディ政権による「不支持表明」の意図、「蒋介石・ダレス共同声明」との関連、また、「危機管理」という用語の定義等に関して問題が提起された。報告者のタイトルにも示されているように、この1962年における中台関係は、中国から見れば、攻撃の「回避」であって、台湾から見れば、少なくともアメリカの支持を取り付けられなかった点で「挫折」であったと言える。総じて、1960年代初頭における米中台関係は、(1) アメリカは、中国が台湾を解放するのには反対である。しかし、台湾が中国に武力攻撃するのも、自国の戦争への介入を招くことになるため支持できない。(2) 中国は、台湾を攻撃するだけの余裕もなく、対外的メリットも少ない。しかし、実際に台湾から「反攻」されても困る。(3) 台湾は、アメリカからの支持と援助がなければ中国を攻撃できない。しかし、大陸反抗を自ら諦めることは避けたい、といった状況と言えるだろう。

第3分科会

「台湾企業組織の発展と人的ネットワーク—計量分析とフィールドワークからのアプローチ」

企画責任者：田島真弓（台湾・国立東華大学）
座長：沼崎一郎（東北大学）

第3分科会は、「台湾企業組織の発展と人的ネットワーク—計量分析とフィールドワークからのアプローチ」をテーマに行われた。台湾の社会や文化の特性が企業組織のオペレーションに与える影響について、社会ネットワーク理論を軸に、計量分析とフィールドワークという対照的な研究方法を用いた二つの報告が行われた。両報告とも台湾の企業経営分析に関わるため、台湾の企業・産業に関して豊富かつ極めて質の高い実証研究を行ってきた川上桃子氏（アジア経済研究所）にコメントーターをお願いし、もう一人のコメントーターは日本における社会ネットワーク分析の第一人者である安田雪氏（関西大学社会学部）に担当して頂いた。

李宗栄氏（中央研究院社会学研究所）の報告「台湾企業グループ間の親族ネットワーク構造」は、台湾の文化的特性の一つである「華人家族主義」を取り上げて、社会ネットワーク理論の計量分析手法を通じてファミリービジネスの急速な成長が台湾企業組織の発展にもたらした影響について分析を試みたものであった。上場企業約600社から代表的なコア企業グループ268社を選び出し、企業の取締役や大株主間の親族関係を分析、台湾企業グループ間の横のつながり、すなわちネットワークの範囲とマーケットに与える影響の度合いを明らかにした。その結果、台湾の企業グループ間ネットワークにおいて、親族関係は消滅するどころか逆に拡大している状況が浮き彫りになった。

田島真弓氏の報告「ネットワーク構造と知識導入メカニズム—台湾IC産業とTFT-LCD産業の比較を中心に」は、台湾社会の特性が企業組織の発展に与えた影響を分析するという視野に立ち、台湾の人的及び社会ネットワークがハイテク企業の技術導入に果たした役割について、シリコンバレーだけでなく、日本からの技術導入も含めて比較検討した。企業間ネットワーク理論とフィールドワークの研究手法を用いて、台湾ハイテク企業が米国からIC関連の先端技術を米国在住の台湾人留学生や技術者の社会ネットワークを通じて導入し、日本からは日本人技術者の直接雇用でTFT-LCD関連の技術知識を導入したプロセスを明らかにした。

コメンテーターの安田氏から李氏の報告に対して、分析単位で企業 dyad (二者関係) を使用したため、観察値が実際に利用した企業数をかなり上回り、統計結果の r-square 値が極めて小さいという指摘がなされた。安田氏は、婚姻関係のある企業グループ数だけを取り込み、その企業 dyad から分析する方法を提案した。また、川上氏からは、企業間婚姻ネットワークにおいて、一般的にファミリービジネスの印象が薄いハイテク企業の経営者が少なからず含まれていた点が興味深いというコメントがなされた。

田島氏の報告に対して、安田氏から社会ネットワークを人的ネットワーク、企業間ネットワーク、産業ネットワークの三層に分類して分析する必要性や、日本人技術者の雇用はタイ等台湾以外の国でも活発に行われており、日本人技術者の海外流出はネットワークの特性の問題ではなく、雇用制度や雇用慣行の問題なのではないかとの意見が出された。また、川上氏からは、日本社会の閉鎖性と技術者の海外流出問題を語る上での論理的整合性、日本と台湾の労働市場の性質の違いや経済発展との関連性、IC や TFT-LCD の産業特性の相異が台湾の技術者導入プロセスに与えた影響について合わせて検討するべきとの指摘がなされた。フロアからも日本人技術者が台湾の TFT-LCD 産業に与えた影響の時代的変遷を分析すべき等、活発な議論が提起された。

第4分科会

「植民地台湾の新旧文学活動に潜在する 外来的要素」

企画責任者：許時嘉（名古屋大学大学院）

座長：中島利郎（岐阜聖徳学園大学）

第四分科会では、名古屋大学大学院の院生である許時嘉と劉海燕の両氏が発表した。コメンテーターは名古屋大学の坪井秀人と天理大学の下村作次郎の両氏であった。

許氏の報告「植民地台湾の漢詩活動と内地日本の漢詩ブームとの接点をめぐって——日清戦争前後の漢学観からの一試論」は、漢学意識と国家意識の交錯する重層的なメカニズムを立体化することで、植民地官民唱和の漢詩活動を総督府の皮相な懐柔政策とのみ見なすのではなく、明治の日本人の漢学観の変容という内面的角度から捉え直すとする試みである。日清戦争前後、「中国に由来する漢学」を「日本に再興される漢学」として位

置づけし直そうとした日本の漢学界の趨勢によって、漢文は漢学のベースとして従来よりも国民教育において重要な位置を占めるように見られながらも、近代日本の国家意識が強化されるにつれて、漢文体は和文脈に見事に置き換えられていった。この意識の二重性の影響により、大江敬香と田邊蓮舟の植民地台湾に赴く靑山衣洲に贈った「任重くして道遠し」という言葉が、アンチ・シナに顕在化された国家意識によるものであり、且つアジアの再興を目指そうとする漢学意識も内包されていたと論及した。

コメンテーターからは、日本伝統文壇における漢詩の位置づけ、漢詩文雑誌『精美』の正当性、形而上と形而下の間における漢文体のゆれという解釈の通用性、植民地漢詩活動の考察の欠如などの指摘があった。また、フロアからは、総督府の役人や政府の関係者として渡台した日本人漢詩人が「純粹／非純粹」的な漢詩人であるか否かという問題が提起された。それに対して許氏は、日本人漢詩人は植民地に赴き、日本の国威を喧伝する任務を背負っていたが、漢詩を作る際には「和臭」を出来るだけ避けようとする漢学意識もその漢詩活動に影響を与えていると回答した。日本漢詩界と日本人漢詩人の社会的な位置づけに対する深い理解の欠如という日本統治期台湾漢詩研究の現状において、国家意識と漢学意識が交錯した日本人漢詩人の心象風景は、植民地の伝統的漢詩活動の一端を担っていた、と理解されるべきであると許氏は主張した。

一方、劉氏の報告「台湾新文学における中国白話文の導入に関する一考察」は、1920年代の陳炯、陳端明、黄呈聡、黄朝琴の白話文提唱の論点と『台湾民報』における中国白話文の文学作品の掲載状況を考察することで、台湾知識人の中国白話文の初期の提唱は、文学改革を目指す中国白話文運動の本意とは異なり、先ず文化普及の工具としての意図が主であったことに言及した。しかし、中国白話文普及のための胡適の文学作品の転載及び中国新文学に関する紹介などは、後の中国新文学理論掲載等への準備段階となっており、また、同時に台湾人による白話文作品の発表は、後の台湾新文学興起の下地となっているとした。このことから劉氏は中国白話文運動と絡み合ってきた台湾新文学の歩みを分節化し、中国白話文運動との細部の類似点と相違点を改めて提起した。

質疑の際、劉氏の報告は台湾新文学史研究に新たな角度からのアプローチとして一定の評価はされたが、台湾新文学発起の台湾人留学生の東京体

験、及び1926年台湾新文学の新たな時期を迎えた象徴である頼和の小説「鬪闘熱」の発表などに触れていないことがコメンテーターから指摘された。フロアからは台湾人である黄朝琴、黄呈聡の中国旅行(1922年6月)における言語使用の実状が問われ、また、『台湾教会公報』などにおいて台湾語ローマ字の使用という現実があるにも関わらず、中国白話文を意識的に取り入れる意図とは何か、という質問があった。これらに対して劉氏は、黄呈聡は中国旅行の際にはすでに北京語が理解できており、黄朝琴も日本留学期間で既にそれを身につけていたと説明し、当時の台湾知識人が祖国中国との連帯を求めるために中国白話文の学習や宣伝に力を注いだと主張した。

以上、この両氏の提起された問題は、それぞれに若干不十分な点はあったものの、台湾文学研究の深化と拡充を十分に象徴する発表であった。企画責任者として、座長の中島利郎先生をはじめ、コメンテーターの先生両氏、関係各位に深く感謝申し上げます。

第5分科会

「台湾2008年選挙の分析」

企画責任者：小笠原欣幸(東京外国語大学)

座長：若林正文(東京大学)

第5分科会は、「台湾2008年選挙の分析」をテーマとして、若林正文座長(東京大学)の司会のもと、小笠原欣幸(東京外国語大学)と岸川毅(上智大学)が報告し、高原明生氏(東京大学)が討論者としてパネルを構成した。

小笠原報告「2008年台湾総統選挙分析」は、標準偏差を用いて投票結果を分析し、2004年選挙と比較しながら2008年選挙の性質を明らかにした。報告では、従来の固定的な支持構造(国家アイデンティティ、族群意識、地域の集票活動などの影響を受ける)は依然として存在しているが、それに縛られない中間派も台湾全土に比較的均等に存在していて、それらの中間派選挙民が、個々の選挙議題ではなく、より大きな論点(両陣営の路線、陳政権8年の評価など)により、民進党政権の交代を求める選択をした、と結論付けた。

これに対し討論者からは、中間派と無党派との関係、候補者と党の路線との関係、候補者のパーソナリティの問題、アイデンティティとナショナリズムの区別の仕方、台湾政治のダイナミズムなどについて質問とコメントがあった。フロアからは、

報告は台湾の内政という視点からの分析だが、中国の対台湾政策はどれくらいの影響力があると考えるか、また、一つの中国原則に関係して「中華民族」という概念が台湾社会の主流の認識になりうるのかという問題提起があった。

岸川報告「2008年選挙後：立法院の役割と政策過程の変容」は、まず立法院選挙における国民党の大勝を、陳水扁第2期政権の躓きを背景とする国民党の優勢が、新選挙制度(小選挙区・比例代表並立制、議席半減)によって増幅された結果であると分析した。次に、「分割政府」下の陳水扁政権において国会内での対立が激化し重要法案の通過が困難になった状況と、そこでの法案審議過程の特徴を明らかにし、審議の効率や質という点で問題があることを指摘した。しかし2008年立法院・総統選挙後は、「一致政府」への構造転換で対立が解消することに加え、馬英九新総統の主導する国会改革の動き、監視体制の強化、議員の質の若干の向上等から、国会審議が改善される可能性があるとの展望を示した。

これに対し討論者からは、民進党の選挙戦略が失敗した理由、議席半減が実現した理由、新選挙制度が議員・党関係に与える影響、予算案の通過状況等に関する質問がなされた。このほか、フロアからは王金平国会議長の役割についての質問があった。

第6分科会

「自由論題報告I」

座長：松田吉郎(兵庫教育大学)

吳玲青(東京大学大学院)「米価変動から見た十九世紀前半の『台運』」

コメンテーター 堤和幸(福岡県大野城市立土の浦小学校)

紀旭峰(早稲田大学大学院)「植村正久と台湾—日本キリスト教者の植民地認識をめぐって—」

コメンテーター 松金公正(宇都宮大学)

吳玲青さんの発表では、米価差を通じ、18世紀末から19世紀前半の「台運」の変容を検討した。台湾と漳泉両府との間の米価差こそ、18世紀の台湾米穀移出が長期にわたって継続された主因であった。台湾の低い米価から米穀販売の利益を得るため、台湾へ赴く民間商船が帰航する際、官穀の運搬を割り当てられ、「台運」を遂行するという18世紀の「台運」の流通構造があった。しかし、1783年から1850年までの間、台湾と漳泉両府の

間の米価差の逆転という「異常」な現象がたびたび発生していたのである。18世紀末及び19世紀前半の、台湾米価が漳泉両府の米価を上回るという現象は、一時的であったとしても、漳泉における高い米価と台湾の安い米価という、両者の米穀需給関係の前提に反したものである。18世紀末期、この構造は乾隆末期の林爽文の乱により動揺した。反乱終結直後、漳泉より高値で推移した台湾南部の米価は南部と漳泉地域を結び米穀交易を阻害した。一方、台湾北部の米価は漳泉より安かったため、北部と漳泉地域の米穀交易を助長にした。渡航ルートを制限されていた商船は、漁船や小船を使って米穀交易先を北部へ変更した。台湾北部の米穀交易には、帰路の官穀搬出義務から逃れることができるというメリットが付随していたため、漁船などによる米穀交易は盛んになっていった。結局、嘉慶中期以降、米穀輸送に携わる商船の減少が進み、「台運」の官穀搬出は徐々に衰退した。渡航ルートの自由化・「専運」などの対策が行われたが、道光中期以前の台湾米価がそもそも高値で推移したため、米価安に基づいて成立していた台湾の米穀交易構造はその前提を失った。道光中期、南北米価の同時高値は清代台湾米穀移出構造の崩壊を意味している。台湾の米価が再び安値の水準に戻っても、南部では北部に比べ米穀交易の利潤を得られないため、商船の渡航先として好まれなかった。このため、南部の「台運」が衰退に陥っても、北部の民間米穀移出が米価安の時期に依然として行なわれていた。18世紀末の「台運」の変化は戦乱後の台湾南部の米価高により起こされた偶発的な現象であった。嘉慶年間の「台運」の回避は意図的な行為の結果である。そして道光年間に「台運」が衰退し続けたのは道光中期までの台湾米価高に対応することができなかったからであった。すなわち、“「台運」の衰退”という同じ現象でも、それぞれに異なった原因が存在していたと述べた。

堤和行氏の評論では呉玲青氏の研究について、「台運」にとどまらず、米価という視覚から米の民間交易を含めた流通構造全体の変化を明らかにしたことに意義があると指摘して上で、特に民間での米の取引の実態が明らかにされる必要があると指摘している。

紀旭峰氏はキリスト教者植村正久の台湾での伝道事業を取り上げ、彼の台湾認識を問うた。植村は基督教を通じて在京台湾人留学生と出会い、台湾へも8、9回伝道に赴き、生涯をかけて台湾での基督教伝道に注いだ。しかし、第一次世界大戦

後、植民地統治を厳しく批判する一部の進歩的知識人とは異なり、植村は植民地主義を否定せず、ただ基督教の人道主義に基づき、植民地政策の改善を求めただけであった。この要因は植村の生まれ育った環境、即ち、幕末期の没落武士階級の子弟であったこと、ある種の「明治愛国者」であったためであると述べた。

松金公正氏は紀氏の発表は植村と在京留学生との出会いから台湾への基督教伝道へと論を展開し、意欲作である。ただ、植村を研究テーマとして取り上げる意義を明確にすべきであり、また、植村の植民地台湾における伝道布教の限界性という論の枠組みからどう研究を発展させていくかということを確認してもらいたいと評論した。

座長としての感想としては、呉玲青氏は清朝時代の社会経済史、紀旭峰氏は日本統治時代の政治史という時代、分野の違いはあるが、両者とも意欲的研究であり、今後の研究において克服すべき課題も明確になったと考える。以上の両研究に触発され、台湾史研究の発展を望みたいということである。

第7分科会

「自由論題報告II」

座長：池上貞子（跡見学園女子大学）

第7分科会では、自由論題報告IIとして、2つの報告が行なわれた。まず、高橋一聡（一橋大学大学院）は「1950年代国民党の『共匪』認識と反共文芸作戦」のタイトルの下に、大陸で起きたいわゆる「胡風」批判を例に論じた。これに対し、コメンテーターの松田康博（東京大学）からは、胡風事件に関する日本での分析に拘泥しすぎず、もっと『共匪』認識を論じるべきである、また比較対象が一方の台湾は政府当局、もう一方の日本は文学研究者となっており、同じ土俵で論じるのに適切とは言えないので、この点を考慮したうえでさらに日本やアメリカ政府の資料もとりあげるべきだ、という指摘と提言がなされた。またフロアの胡風研究者から、同時期の大陸における状況についての説明や胡風研究に関する助言もあった。

一方、松崎寛子（東京大学大学院）は「台湾高校国文教科書における台湾文学」のテーマで、とくに龍騰文化出版社発行の「国文」教科書に所収された台湾現代作家鄭清文の「我要再回来唱歌」を例に、戦後台湾における国文教育と台湾文学との関係について論じた。民主化を達成し、新しい

「国民国家」形成を模索中の台湾において、台湾文学がどのように国文教科書のなかで位置づけられ、また教育現場においてどのように教えられているかについての考察が報告された。この発表に対し、コメンテーターの黄英哲（愛知大学）からは、そうした一連の教育政策の流れを自分自身で体験した側としての所感が述べられるとともに、苦心の調査資料による裏づけなどへの評価と今後さらに発展すべき方向への期待などが言及された。

第8分科会

「自由論題報告 III」

座長：植野弘子（東洋大学）

金戸幸子報告 「1930年代以降の台湾における植民地的近代と女性の職業の拡大—八重山女性の植民地台湾への越境を促したプル要因との関連を中心として—」

本報告は、八重山女性の渡台を促す台湾のプル要因を、台湾の統計資料、雑誌記事、求人広告などをもとに分析したものである。八重山女性は社会的上昇を果たそうとする積極的意欲をもって近代化した台湾を目指した。こうした移動を促進した要因として、台湾における女性の職場進出の増加と職域の拡大があり、報告者が聞き取り調査をした八重山女性たちの台湾における職域にも、同様の傾向がみられたとしている。コメンテーターの浅野豊美氏は、本報告を八重山女性の移動を歴史のなかに位置づけた研究として評価するとともに、台湾の消費文化にみる日本と中国の影響、台湾体験の年齢、総力戦の中での女性の労働、台湾経験の語られ方、八重山出身者による就職の斡旋など、考察すべき課題を指摘し、報告者との間で質疑応答を行った。

磯田一雄報告 「皇民化期台湾における日本語短詩文芸—戦前台湾短歌・俳句と戦後台湾歌壇・俳壇のミッシング・リンクを求めて—」

本報告は、短歌・俳句・川柳を一括して「日本語短詩文芸」とし、戦前に普及したそれが、1960年代に復活・再生するに至った実態を探ろうとしたものであった。報告者は、台湾人の日本語短詩文芸は生活の真実や自己の内面を表現する「生活詠」であり、このことが戦後の日本語短詩文芸の復活につながったと指摘した。コメンテーターの星名宏修氏とフロアからは、和歌と俳句を「日本語短詩文芸」として括ることに対して、台湾における和歌と俳句との教育内容の差異、それぞれの表

現の特異性などから疑問が呈された。さらに、皇民化期の和歌・俳句教育の実態、真情としての生活詠と建前で詠われる国策協力の短詩との分離、短詩のもつ普遍性などについて、コメンテーターと報告者の間で質疑応答が行われた。

第9分科会

「自由論題報告 IV」

座長：朝元照雄（九州産業大学）

第9分科会では経済分野に関する2つの報告があった。

まず、荒井久夫会員（専修大学大学院）が「台湾産業のスピン・オフ形態の創業事情—IT、機械、金属産業を中心として—」という報告を行った。

本報告は、豊富な企業調査結果から、スピン・オフ形態で創業した企業を「ベンチャー型」と「白手起家型」の二つに分類し、各企業の創業事例、現状、経営環境の変化について考察を行った。また、現在それらの企業は、後発国による激しいキヤッチアップという脅威に直面しており、今後の展開を見守る必要があるとの指摘があった。コメンテーターの伊藤信吾会員（みずほ総合研究所）やフロアからは、スピン・オフした企業の統計処理の問題、「白手起家型」という用語の問題についての質問や意見がよせられた。また、座長の朝元照雄（九州産業大学）会員から、奇美実業に見られる「異業種からの参入」という新たな分析視覚の必要性の指摘があった。

次に、寺尾忠能会員（アジア経済研究所）が「台湾の船舶解体業の盛衰と資源リサイクル産業」という報告を行った。

本報告の目的は、1960年代に興った船舶解体業の発展過程とそこから派生した五廃金業再生業の展開について、環境政策の視点から分析を行うものであった。報告では、船舶解体業の発展は伸鉄や屑鉄への国内需要の増加によるところが大きく、五廃金業再生業は船舶解体業の周辺産業として発展したとし、船舶解体業の繁栄と五廃金業再生業の展開は現在のリサイクル産業や国際的再生資源循環に影響を与えたと指摘がなされた。コメンテーターやフロアからは、伸鉄・屑鉄の内外価格差および五廃金業再生業が長期存続した要因や船舶解体業の衰退と70年代の重化学工業化との関連についての質問があった。また、座長から中小企業の電気炉使用による企業の臨機応変な戦略や「十大建設」以降の鉄鋼業の高炉転換といった歴

史的事実の補足が加えられ、分科会の総括が行われた。

(文責：圖左篤樹・京都大学大学院)

第10分科会

「自由論題報告Ⅴ」

座長：山口守（日本大学）

この分科会は統一テーマに基づいて構成されたものではなかったが、二人の発表者の報告内容が、共に戦後台湾文学における作家の帰属意識や喪失感に関するものであったため、期せずして問題意識や討論内容が相互に響き合うものになった。

まず倉本知明氏（立命館大学大学院）の研究報告「身体的記憶から都市の廃墟へ」では、朱天心の「ハンガリー水」を手がかりに、作家のアイデンティティの根拠としての眷村における記憶が、戒厳令解除後の本土化潮流の中で失われた記憶として、個人の中で共犯意識を伴って再表象されるメカニズムを明らかにしようとした。これに対して、魯迅「狂人日記」を引用して示された被害者/加害者の対立構図で外省人をマイノリティとして捉えるなら、戦後台湾社会における外省人の特権性と本省人の歴史記憶を「族群」対立の中に解消してしまうことになるのではないかと意見が出された。一方西端彩氏（お茶の水大学大学院）の報告「モダニズム vs 郷土文学」は、初期にモダニズムの傾向があった黄春明が後に郷土文学作家と見なされる経緯を、初期の短編「男人與小刀」の解説を例として説明しようとするものであった。この報告の中でモダニズムの概念規定が曖昧である点がまず指摘され、作風の変化という解釈よりも、故郷の呪縛から逃れようとする本省人作家の郷土否定の作品として、外省人作家の喪失感と対置できるものではないかとの見方がコメンテーターから提出された。この呪縛からの脱出という視点から見れば、倉本氏の朱天心論と西端氏の黄春明論は互に通じるものがある。

最後になるが、予定していたコメンテーターが急病のため出席できず、急遽三木直大氏（広島大学）に二人の発表者のコメンテーターを同時に務めてもらう事態となった。事前準備も十分にできない中で、的確かつ高度な講評によって討論のレベルアップに寄与した三木直大氏に、この場を借りて深く感謝申し上げたい。

第11分科会（実行委員会企画）

「涂照彦・劉進慶の仕事を読み直す」

座長：駒込武（京都大学）・佐藤幸人（アジア経済研究所）

涂照彦『日本帝国主義下の台湾』と劉進慶『戦後台湾経済分析』、奇しくも同じ1975年に東京大学出版会から刊行されたこの両著作は、涂氏は主に戦前、劉氏は主に戦後を対象にしているという相異がありながらも、台湾研究において「古典」ともいべき位置を占めている点で共通している。今日、私たちは、この「古典」から何を学び、何を批判すべきなのだろうか？両氏が鬼籍に入られた今だからこそ、あらためてその意味を問い直す場を設けたいと考え、実行委員会企画として分科会を設定した。

第一報告者の湊宏宏（日本学術振興会特別研究員）は涂氏の著作をとりあげ、矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』が日本帝国からの単眼的分析であるのに対して植民地本位の複眼的分析を展開したことを評価すべき点として確認しつつ、産業構造に対応する金融構造が未解明であるという問題点を指摘、また、政策論理と企業論理を峻別し、資本市場からの圧力が国策遂行を制約した局面を捉える必要性について論じた。第二報告者の北波道子（関西大学）は、劉による官民二重構造論モデルが実際の経済発展を前にして政府の役割を重視するものに修正されたのではないかと論じ、1965年以後の台湾を「開発独裁」と規定する後年の劉の議論は「在日中国人学者」として「開発と侵略は同根」と発言してきたことと整合していないように思えるという疑問を提示した。

湊報告についてコメントした黄紹恒（交通大学）は、涂における土着資本の衰退という理解に疑問を呈し、実際の経済活動は統治者と被支配者という図式では理解しきれない側面があると述べた。北波報告についてコメントした平川均（名古屋大学）は、劉において国家への関心は初期から一貫して強く、1975年当時の低開発の強調は対米・対日依存的経済循環構造に陥っている事実を重視したためと説明した。また、劉氏において「開発独裁」という言葉は「開発を意識する独裁」という意味で用いられているのであって、独裁そのものを道徳的に否定している点にブレはないと論じた。会場からは、「開発と独裁は同根」という劉氏の主張はどのような意味でなされているのか、より綿密に検討する必要があるという質問や、劉氏が日本国籍を取得したのはなぜか、涂氏や劉氏は戴国

輝氏による台湾史研究をどのように評価していたのかといった問いが提起された。

全体として、涂氏については『日本帝国主義下の台湾』の理解そのものが問題とされたのに対して、劉氏については『戦後台湾経済分析』以後の著作や、さらには生き方にもかかわる問いが提起されることになった。これは、報告者やコメントイターによる問題の立て方が違うだけでなく、両氏の言論そのものの性格の違いによるところも大きいと感じられた。また、湊報告では「独占」「帝国主義」などのマルクス経済学の基本概念にまつわる問題点も指摘されたが、マルクス経済学を基本的枠組みとしている点は劉氏についても共通しており、この点について議論を深める時間を持てなかったのは残念であった。ただし、狭義の経済学・経済史研究者だけでなく、ディシプリンを異にする人びとの間で議論ができたのは収穫であり、あらためて両氏の仕事のスケールの大きさを確認する機会ともなった。なお、平川によるコメントは、晩年まで劉氏きわめて近いところで仕事をされてきた方の発言として貴重な示唆を数多く含んでいるので、コメントの内容を北波による報告とあわせて、後日、文章として発表する場をつくりたいと考えている。(文責：駒込武)

学会・シンポジウム等参加記

「2007年台湾研究の国際的展望 シンポジウム」について 黄毓婷（東京大学大学院）

2007年10月26（金）、27日（土）の二日間にわたり、カリフォルニア大学サンター・バーバラ分校において、国際シンポジウム「2007年台湾研究の国際的展望シンポジウム」が開催された。主催者の台湾研究センター（The Center For Taiwan Studies, CTS）は2004年4月に設立されて以来、年に一度国際シンポジウムを開催するようになり、2007年で四回目を迎えている。

計27名の発表・講演者の中には、アメリカ以外にも、台湾、日本、イギリス、フランス、オーストラリア、カナダからの研究者が含まれていた。台湾研究を国際的な視野から照射するという意気込みが、発表者の顔ぶれから読み取れるだろう。

一日目のセクション1では、台湾研究センターの杜国清教授の基調講演「グローバル化と台湾研究」（タイトルは筆者訳、以下同）にひきつづき、Dafydd Fell「ヨーロッパにおける台湾研究とロンドン大学東洋アフリカ研究所（SOAS）の役割」、Bruce Jacobs「オーストラリアにおける台湾研究」、施芳瓏「比較的観点下の台湾研究：ロンドン大学LSE校の台湾文化研究プログラムについて」、Angel Pino「フランスにおける台湾現代文学」、Stuart Thompson「アイルランド研究から台湾研究を考える」の五つの発表が行なわれた後、国立台湾大学、国立清華大学でそれぞれ台湾文学研究所の主任を務める柯慶明教授と陳萬益教授によって、台湾文学研究のアカデミズム化までの道のりと現状が紹介された。これらの発表を通じて、台湾内外における台湾研究が、漢学／中国研究から学問として顕在化していく過程を経て、現在研究分野の一つとして確立しつつあることが論じられた。

欧米諸国における台湾研究は不可避免的に比較研究の座標軸を提供する。Stuart Thompson「アイルランド研究から台湾研究を考える」、Frank Muyard「ポスト・モダン時代の国家構築：ケベックと台湾の比較」がその二つの例であり、比較対象双方に新しい視座が提供されることで、これからの台湾研究に新たな一面が切り開かれるであろう。注目されるのは、「第四世界」という原住民族についての世界的な関心の高まりである。Andrew Morris「蛮人チーム『能高団』：1920年代東部台湾の野球と文明化」、下村作次郎「連結する帝国の物語と『届かない』帝国の物語：呉鳳伝説・霧社事件・『サヨンの鐘』の検証」、Terry Russel「世界における台湾原住民族：国連から第四世界へ」、Scott Simon「台湾研究と台湾原住民族」、Darryl Sterk「戦後台湾の小説と映画における番／漢恋愛の表象：移住者の民族主義と異民族間のロマンス」がそうである。これらの発表は今回のシンポジウムの中で大きな割合を占めており、その関心も歴史から現在の政治的な動きまで論が多岐にわたっていた。

二日目はとりわけ文学についての発表が多く、姚栄松「台湾語文学運動史の一考察」、林佩吟「反抗的青春：候孝賢『童年往事』」、楊徳昌「牯嶺街少年殺人事件」と蔡明亮『ナーツァ少年』、林鎮山「現代英雄：鄭清文と『大きな影』を論ずる」、Sakina Cutivet「モダン社会の島民：劉呷鷗と翁鬧のアイデンティティと都会崇拜」、黄毓婷「写実と非写実：翁鬧『懸爺さん』の中の言語問題」が挙げられる。セクション6では特別に翁鬧作品の英訳者をディスカッサントとして招いた。カリフ

オルニア大学の台湾研究センターはアメリカの学界における最初の台湾研究機関として、台湾文学の英訳に力を入れている。1996年より発足した「台湾文学英訳叢書」は台湾文学を系統的に英語に翻訳する長期的なプロジェクトで、年に二冊刊行され、2007年のシンポジウム当時は20号にまで至っていた。2008年には葉石濤『台湾文学史綱』の英訳を刊行する予定であり、英訳には日本語版の訳注を取り入れることになっている。このほか、毎年恒例の国際シンポジウムの論文集は翌年「台湾研究叢書」として刊行されている。

高一生(矢多一生)とその時代の台湾原住民族エリート—高一生生誕100周年記念国際シンポジウム—
—参加・運営記
森田健嗣(東京大学大学院)

2008年4月18・19日、「高一生(矢多一生)とその時代の台湾原住民族エリート—高一生生誕100周年記念国際シンポジウム—」が奈良県天理市で開催された。18日には「春の佐保姫 高一生記念音楽会」(於:天理市文化センター)が、19日には、午前は個別研究報告、午後はパネルディスカッションと記念講演が行われた(於:天理大学)。まず、本シンポが開催されるにいたった経緯から紹介したい。本シンポを開催したのは「高一生(矢多一生)研究会」である。設立のきっかけは、本研究会メンバーが台湾原住民族エリートである高一生(日本名:矢多一生)の子息と知り合ったことにさかのぼる。そして「原住民族エリート」という観点から、高一生や同時代の原住民族エリートに光を当てることを構想し、高一生生誕97年目の2005年7月5日、本研究会が設立された。本研究会は設立当初から、本シンポの開催を予定していた。そのために、研究誌『高一生(矢多一生)研究』を計10号刊行した。本研究会の進展と同時期に、台湾においては様々な高一生にかんする音楽会や催し、研究発表等が行われた。こうした現地での研究動向をも吸収しつつ、約3年間の研究活動を通して研究業績を蓄積し、本シンポ開催のための力量を養ってきた。

18日の「音楽会」では、高一生次男の高英傑氏をはじめ、ツォウ族トフヤ社頭目を含む約20名が来日し、高一生の代表作「春の佐保姫」や「つつじの山」など6曲とツォウ族の伝統音楽が披露された。音楽会上演前には、高英傑氏による講演「父の思い出『下り列車』」と周婉窈教授(台湾大学)

による講演「高一生、父そしてあの沈黙させられた時代」が行われた。また、佐藤浩司教授(天理大学雅楽部顧問)の協力で天理大学雅楽部の雅楽演奏があり、そこで高一生の残した短歌に雅楽の曲が付けられて演奏されるという演出もあった。

19日の午前は、次の個別研究報告がなされた。陳昱升(台北市立教育大学中国語言文学研究所博士課程)「論鄒族先覚者高一生之族群文化適応問題」/許雅筑(国立清華大学台湾文学研究所修士課程)「同化於文明与近代国家——高砂族青年矢多一生赴日観光及其影響」/鄧慧恩(国立成功大学台湾文学研究所博士課程)「高一生与学校社区化教育的接触:以『ハーベー先生』作為視角」/劉麟玉(人間文化研究機構連携研究員)「ウオグ・ヤタウユガナ(矢田一生、高一生)の音楽の初歩的考察——植民地台湾の音楽教育とツォウ族音楽の観点から——」/黄雅芳(国立中正大学台湾文学研究所修士課程)「日治時期台湾原住民族菁英教育和語文書寫——以鄒族高一生為例」/中西美貴(京都大学大学院博士課程)「エリートにはなれなかった『蕃婦』たち」/吳国聖・陳怡欣(国立政治大学民族学系研究所修士課程)「原音重現——淺井惠倫資料中的花岡一郎語料之研究」/范燕秋(国立台湾師範大学台湾史研究所副教授)「日治後期台湾原住民族的近代変遷与族群菁英的政治活動——以泰雅族樂信・瓦旦和鄒族吾雍・亜達烏猶卡那为中心」。午後はパネルディスカッション「高一生とその時代の台湾原住民族エリート及び現代的課題」が行われ、次の基調報告がなされた。孫大川(国立政治大学教授)「身教大師 Baliwakes——他的人格、音楽和他的時代」/浦忠成(国立台湾史前文化博物館館長)「如漩渦的處境:戦後高一生の遭遇及其生命意義」/汪明輝(台湾師範大学教授)「鄒族二二八事件中的『阿里山基地』:變遷下的 lalauya 部落之人與地」/楊智偉(山美社区發展協會理事)「国中之国——新夥伴關係與台湾原住民族自治」/鄧相揚(台湾史研究家)「Gaya 與義理——花岡一郎與花岡二郎の族群認同」/吳觀人(中央研究院教授)「議會政治家 樂信・瓦旦」/吳豪人(台北駐日經濟文化代表処顧問)「原住民『エリート』のジレンマを乗り越えて」/馬場美英(高一生研究家)「高一生(矢多一生)の音楽からよみとれるもの」/塚本善也(中国文化大学助理教授)「高一生研究の可能性を探る」。

個別研究報告の後には張炎憲館長(国史館)より「高一生と台湾白色テロ」と題する記念講演がなされた。これは2006年より国史館が白色テロ政治

案件の整理に着手した研究成果に基づくものであった。

最後に、高一生夫妻の霊前に『高一生(矢多一生)研究』を供えるため、研究会から高英傑氏に同『研究』全号が贈呈された。高英傑氏は父・高一生を想起しつつ「千の風」を歌われ、会場は感動の渦に包まれながら、本シンポは終了した。

なお、100名を超える参加者が来場された。

2008年度天理台湾学会第18回研究大会参加記 許時嘉(名古屋大学大学院)

私は6月28日に奈良・天理大学で行われた天理台湾学会研究大会に参加した。朝5時半に名古屋を出発したが、4～5回の乗り換えで、やっと辿り着いたのは10時過ぎ頃であった。今回の大会は、午前と午後の部に分かれ、各々三名の先生が発表した。

まず、藤野陽平先生(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)の「台湾における気功の現代的展開」は、現在台湾で活動する気功グループと当該団体の基本的な教典を人類学研究の事例として取り上げ、現代社会における気功の特徴を綿密に考察した。当該団体における「気」の伝統的な概念がブリコラージュ的手法によって現代的な観念とアレンジされているという指摘は興味深い。

紙村徹先生(神戸市看護大学)の「幻想ミステリ——作家日影丈吉の“台湾”へのアプローチとしての境界人的スタイル」は、日影丈吉の台湾を題材とした小説における「女性表現」のレトリックを考察したものである。小説に登場した日本人男性と台湾人女性との関係は日本軍と台湾社会を原型として物語っており、戦中に三年間軍人として台湾滞りを経験を持った日影丈吉の台湾観がうかがわれることが指摘された。

磯田一雄先生(大阪経済法科大学アジア研究所)の「『短い』ということ——黄霊芝俳句論における情報量の equivalence をめぐって」は黄霊芝の漢語俳句に現れる「言葉の短さ」と「二章体」(両物対立原理を含む句)の特徴に注目した。異言語であっても、情報量が日本の俳句に等量することを常に意識している黄霊芝の詩作は「相互に詠み変え可能」な共通文芸の構築に一定の程度の意味を与えるものであることが読み取れた。

深川治道先生(天理大学おやさと研究所)の「明治期の天理教台湾伝道」は午後の発表の最初のも

ので、明治29年8月に渡台した台湾布教の嚆矢である古谷マツをはじめ、台湾で伝道した人物と教会の設立の歴史を考察したものであった。天理教においては男女の役割の固定がそれほどはっきりしてはなくて布教には女性のはたらきが大きいという最後に提示されたことは、ジェンダーの視点からも天理教に関する研究に新たな示唆を提供した。

魚住悦子先生(国際交流基金関西国際センター)の「台湾原住民族研究エリートに関する初歩的考察——ロシン・ワタン、花岡一郎・二郎、高一生、バリワクスから」は植民地時代の原住民知識人像の特徴を明らかにしたものであったが、従来の個人の生涯にのみ着目した研究と異なり、エリート階層としての彼らの生き方をまとめて考える可能性を提起した。原住民知識階層の視点から彼らの社会的意味と位置づけに対する注目は今後の原住民研究に新たな視点を開くものだと感じた。

最後に中島利郎先生(岐阜聖徳学園大学)の「日本人作家の系譜——詩魂の漂泊・長崎浩」は新潟出身の日本人作家長崎弘(1908～1991)の生涯を追って、上京以前の郷里での教員時代の初期の詩作からはじめ、図書館員として山形に赴任してからの山形詩壇との交流と詩誌『犀』の創刊、長野県立図書館に移って後の真壁仁等とともに発行した散文誌『朔北』、彰化市立図書館の責任者として台湾に招かれた経緯をたどりつつ、詩作の変化を綿密に考察した。中島先生は、現在の日本統治期台湾文学研究における日本人作家の定義されにくい曖昧さを重要視し、日本人作家の生涯の立場に立ち戻って彼らの「台湾」の意味を追究することが植民地文学史研究に新たなアプローチを示すであろうと述べられた。

公開講演は近年、台湾語テキストの編集や辞典の編纂に様々な成果を挙げている村上嘉英先生(天理大学)を招いて「台湾語における日本語からの外来語」を題目として行われた。村上先生は、台湾語における日本語からの外来語の多さを示し、日本語を受容しつつ新たな変化を遂げた台湾語の現状を語り、私は興味深く聞かせていただいた。

大会の各発表では、学会会長の下村作次郎先生をはじめ、司会等を担当した佐藤浩司先生、岡崎郁子先生、池田士郎先生、鄭正浩先生等多くの先生たちやフロアの河原功先生から多くの質問が寄せられ、活発な議論が交わされた。

台湾研究関連情報

台湾研究インターネット・リソースの紹介 林果顯（台湾・政治大学大学院）

台湾は近年多くの人材と費用を投入することにより、文献資料、画像、音声などがデジタル化され、数々のデータベースが設置されている。また学術団体や研究機関は、海外との交流を意図してホームページを作成し、最新の学術活動情報を公開している。しかしながら、新しく設置されたホームページがあまりにも多すぎ、しかも台湾主催の学会や出版のニュースなどが頻繁に更新されるため、その情報をどのように把握するかが問題となっている。そこで、まず、研究者に対して台湾史学界の最新動態を迅速に知らせている総合情報ホームページを紹介し、次に、特別なデータベースを備えている研究機関と図書館のホームページに着目しながら総合的なホームページを重点的に紹介する。最後に、政府「公報」の画像資料システムを例として、データベース運用による台湾史研究の可能性を考えてみる。ここでは歴史学関係の政府機関と研究機関のホームページを主とし、その他の学科や個人による評論のホームページは対象外とした。

1. 総合情報のホームページ

最近まで台湾史の研究情報に関する総合的なホームページは存在せず、研究者はこれまで各学術機関のホームページすべてに目を通すしかなかった。このような問題を解決するために、「臺灣史資訊交流站」が誕生した。当ホームページは、5つの方面からの最新情報を収集し、研究宿泊とカリキュラム、シンポジウムと講演会、出版と史料情報、展覧会、投稿募集と奨学金の情報を掲載している。中央研究院、台湾大学、政治大学、台湾師範大学などの学術機関、あるいは国史館、国史館台湾文献館、国立台湾歴史博物館などの史料所蔵機関主催の講演会、展覧会あるいは出版情報などをすべて短時間で知ることができる。出版情報においては、新刊の外に、外国語（主に日本語）の植民地台湾史研究関係の新刊情報なども閲覧できる。このホームページの研究情報は近代史と現代史に比較的傾いており、台湾史すべてを網羅しているとはいえないが、その情報は絶えず更新

され、台湾の重要な研究機関の活動、カリキュラム、出版情報が適切に掌握できる。一人の大学院生が設置したホームページが、これほどの実用性を持っていることは感嘆に値する。しばしば開催されるシンポジウムや内外で出版される台湾史関係書籍の適切な把握を懸念してやまない人にとって、このホームページは重宝である。

さらに類似のホームページに「三十三年落花夢—近代中国史研究資訊」がある。当ホームページは東華大学歴史学科が設置した。テーマは中国近代史研究の最新動向であり、シンポジウム、講演会、新刊書や論文などの情報のほか、新聞報道から収集した研究者、研究機関、新刊書情報、档案情報など、さらには特殊な研究動向も掌握できる。たとえば、「1946~1955 蔣介石日記 史丹佛大學解密」という情報は、当ホームページの収集している蔣介石日記に関係する記事の一つである。閲覧者はこの档案の開放と利用状況を常に知ることができる。近代中国史と台湾史は密接不可分である。特に、1945年以後の台湾を統治した人物と統治制度の研究は、1945年以前にすでに存在していた近代中国のそれらと相互補完が可能であり、領域を越境する研究を進める必要がある。上述の蔣介石日記の情報は台湾史研究のホームページでは必ずしも閲覧できないが、蔣介石研究の台湾史研究に対する価値を否定できる者はいない。

さらに範囲を広げてみる。国家図書館漢学研究センターが設置した「漢学研究通訊電子報」は、台湾とその他の国における漢学研究の現況を紹介している。それには、シンポジウム、学術活動、人事動態、出版情報、漢学研究センターのニュースなどの最新情報が含まれている。漢学の領域は広範であり、歴史学のほか、文学、文化、言語、宗教、哲学など人文学関係の情報もまた同時に閲覧でき、分野を越えて台湾史研究に貢献している。また、欧米の漢学研究関係のニュースを迅速に掲載している。この電子ニュースは政府機関が責任を負っており、1ヶ月に1回発行されている。中国語版と英語版があり、電子メールで簡単に利用でき、前述の2つのホームページよりも規模は大きい。

研究団体における各活動情報からも、特定の研究領域における最新の動向を知ることができる。たとえば、「吳三連台湾史料基金会」は民間組織であり、ホームページの中で同基金会所蔵の台湾史資料を検索できる。とりわけ、民衆史は特別所蔵の一つである。中央研究院の冷戦時期兩岸發展比較研究グループと明清研究会のホームページ

も有用である。前者は戦後台湾と中国の発展における比較研究情報を重視しており、後者は明清時期研究に関する活動情報を総括し、台湾史研究における空間的、時間的視野の拡大に貢献している。

2. 研究機関と図書館のホームページ

台湾では、近年、大学に台湾史関係の研究所(大学院)を設置し始めた。政治大学台湾史研究所と台湾師範大学台湾史研究所、高雄師範大学台湾歴史研究所(2008年学生募集開始)以外にも、台湾文化、文学、言語関係の研究所、そして学部学科がある。これらのホームページでは教員、カリキュラム、学術活動などの資料を提供すると同時に、テーマを絞ったデータベースが開放されており、台湾史研究の現況観察に便利である(たとえば、政治大学台湾史研究所の戦後台湾憲政史年表データベース)。また中央研究院の台湾史研究所も、特別文献である古文書データベースと画像データベースを提供している。

データベースは、図書館のホームページが最も豊富である。データベース数は国家図書館が最も多く、「台湾資料」、「政府資訊」、「漢学資料」、「古籍文献」、「電子資料庫」などがある。その中でも、「電子資料庫」には特に台湾研究の17件のデータベースがあり、歴史辞典、新聞、古書と画像データベースなどを含んでいる。「台湾資料」の中の「台湾研究入口網」は、13件の大型データベースを備えており、政府の情報と学術研究成果が含まれている。キーワードを入れるだけで、領域を越え、検索が可能である。当ホームページ内の「網站指南」は、台湾研究の重要なデータベースにリンクしている。一つ一つ調べると、多くの面白い資料を発見できる。とりわけ、注目すべきホームページは、国立台中図書館の「旧版報紙資訊網」であり、当館所蔵の1945年から1961年までの新聞をデジタル化しており、検索可能である。廃刊になった新聞も閲覧でき、便利である。また、中央図書館台湾分館の「台湾学研究中心」は、日本統治時代の資料と地図に基づいて発展していた総合的なデータベースが数多く、『台湾教育会誌』と『台湾建築会誌』など日本統治時代の文献が直接に検索し閲覧できる。そのほか、「台湾古蹟学習知識庫」や「明清台湾資料庫」など別の会社が開発したデータベースも含まれていて、台湾分館の館内だけで利用できる。さらに、檔案管理局の「全国檔案目錄查詢網」と国史館のホームページは、檔案管理局所蔵の「機関檔案」と「国家檔案」

を検索可能であり、図書館以外で豊富な所蔵量を備えているデータベースである。

中央研究院設置のホームページ「台湾歴史文化地図系統(台湾歴史文化地図システム)」(日本語版の説明あり)は、特筆に値するデータベースである。当ホームページは、主に「歴史文化地図系統(WebGISデータの統合利用)」、「空間資料整合(台湾堡図データベース)」、「文献資料整合(漢籍データベース)」の3システムにより構成されている。「歴史文化地図系統」は、領域を超えた共同作業の賜物であり、WebGISの技術と歴史学研究者の文献読解能力とが結合したもので、古文書上にデジタル化された地形図が記載されている。「空間資料整合」はその他の地形図と地名(旧名を含む)のシステムであり、「文献資料整合」は台湾総督府檔案、台湾地方志文献データベース、中央図書館「台湾学研究中心」の日本語古書文献総目録など、常に研究者が利用する重要なデータベースを含んでいる。台湾史研究者から言えば、「台湾歴史文化地図」のホームページは、近年台湾が全力をあげて推進している史料デジタル化の成果の表れであり、もし国家図書館のデータベースと連携運用されれば、より大きな成果をあげることが期待できよう。

3. 政府「公報」の画像資料システム

データベースの内容が多すぎるため、一つ一つを深く掘り下げて紹介することはできない。以下、作者が比較的精通している政府「公報」の画像資料システムを例に挙げ、台湾史を研究する上でのデータベース利用方法を説明する。中華民国政府における中央行政、法律、地方行政の3データベースである。まず、「總統府公報影像系統」は1912年(民国元年)から現在に至るまでの中華民国における中央政府「公報」の画像全文を収録しており、『臨時公報』(1912.2.20-1912.4.26)、『臨時政府公報』(1912.1.29-1912.4.5)、『軍政府公報』(1917.9.17-1918.5.14)、『政府公報』(1916.1.1-1928.6.13)*1、『国民政府公報』(1925.7.1-1948.5.19)、『總統府公報』(1948.5.20-)などを含んでいる。これらには、北洋政府あるいは汪精衛の「中華民國国民政府」などは含まれていない。テーマの概要(キーワードを含むテーマ)、出版期日、「公報」巻号を入力し、「公報」名称を選択することによって検索でき、画像を閲覧及びダウンロード、印刷できる。中央政府「公報」の内容は、当時の各種政府組織法規、人事命令、「總統文告」及び宣戰、斷交、戡亂、

戒嚴などの総統・中央政府による専属的職権の重要命令である。国民党執政下における中華民国の政府運営や法律命令を理解する上で至極便利である。

*1:『政府公報』では、第 0001-0085 期の出版期日(おそらく 1916 年 1 月 6 日から 1916 年 3 月 31 日までの分)に誤りがある。これは袁世凱帝政以後の「洪憲元年」を「民國元年」と誤って入力したためと思われる。

次に、包括的な法律関係のデータベースとしては、「立法院法律系統」が利用できる。当ホームページは、立法院成立以来、制定、修正あるいは廃止した法律条文の内容を収録している。キーワード入力によって法律名称あるいは法律条文を検索でき、法律全文のほか、各法律のこれまでの各修正条文がすべて表示できる。また「国民政府時期立法院公報影像系統」(1928-1943)と「立法院公報影像系統」(1948-)*2などを併用することにより、立法院議事録、速記録などを通し、その立法過程をさらに一歩踏み込んで把握できる。

*2:本システムには 1953 年(民国 42 年)から収録と注記されているが、これは『立法院公報』のみで、会議速記録などの資料は 1948 年から収録されている。

上述の中央行政レベルに関わる法律や政策とは異なり、「台湾省政府公報網際網路查詢系統」は、主に台湾の「省レベル」の単独法規を収録しており、『台湾省行政長官公署公報』(1945 年-1947 年)と『台湾省政府公報』(1947 年-2001 年)を含んでいる。年度、季節、期日、内容の種類、公文書の種類、主管機関、テーマの 7 種類の方式により、画像全文が検索・閲覧可能である。行政長官公署公報からは、国民政府が日本植民地時代の遺産である法制をどのように処理したのか、中華民国の法制とどのように調整したのかを理解できる。さらに重要なことは、台湾の 38 年間にわたる戒嚴令の中において、台湾省警備総司令部などの軍事機関が発表した大量の管制規定を観察することにより、国民党政府の社会管理方式が理解できることである。「公報」の活用によって、大陸時代の中華民国史と戦後台湾史の連続・断絶をめぐる課題、そして国民に対する統制と動員をめぐる課題の進展も期待できる。また、当資料は 20 世紀後半の台湾地方行政の実態、農漁業の発展状況、山地行政(原住民対象)、教育政策の内容なども理解できる。

最後に、国家図書館の「政府公報查詢系統」は、必ずしもすべての資料に画像があって閲覧できるわけではないが、同システムは、総統府、五院、行政院各部会の 60 種類を越す「公報」を総括しており、時間的には 1912 年から現在までを網羅

している。これら政府「公報」のホームページは、中華民国政府の行政行為を把握するために便利なデータベースといえる。

以上紹介したインターネット・リソースを利用すれば、現在の台湾における台湾史研究の学術活動情報を把握し、研究資源を有効に活用できるであろう。しかしながら、この先同様のホームページが増えるにつれ、データベースの情報量も大きくなっていく。ゆえに、どのようにテーマ別に情報を整理し、そして少数のホームページを利用するだけで大部分の情報を把握できるようにすることが将来考えなければならない課題になるだろう。一方で、インターネット・リソースを利用した研究方法に問題が生じる可能性もある。たとえば、一部のデータベースはキーワード検索しか方法がなく、資料を総覧できない。これでは、キーワード検索でヒットしなかった関連資料が無視されてしまうことになる。さらに、データベースによっては、特定の場所あるいは特に認められた研究者だけが閲覧可能であり、外国の研究者にとって相当に不便である。これから、このような問題が徐々に浮き彫りになってくるかもしれない。

・総合情報のホームページ

臺灣史資訊交流站：
http://blog.roodo.com/tw_history/
三十三年落花夢—近代中國史研究資訊：
<http://tw.myblog.yahoo.com/modern-china>
漢學研究通訊電子報：
<http://ccs.ncl.edu.tw/ccsnews/>
吳三連台灣史料基金會：<http://www.twcenter.org.tw/>
冷戰時期兩岸發展比較研究群：
<http://www.sinica.edu.tw/%7Ebsts50/index.html>
明清研究會：
http://mingching.sinica.edu.tw/chinese/index_ch.html

・研究機関のホームページ

政治大學台灣史研究所：
<http://www.taiwan.nccu.edu.tw/index.htm>
台灣師範大學台灣史研究所：
<http://www.ntnu.edu.tw/taih/taih/page/>
高雄師範大學台灣歷史研究所：
<http://www.nknu.edu.tw/~th/>
中研院台灣史研究所：<http://www.ith.sinica.edu.tw/>

・図書館と史料館のホームページ

國家圖書館：<http://www.ncl.edu.tw/>
國家圖書館電子資料庫：<http://esource.ncl.edu.tw/>
國家圖書館台灣資料台灣研究入口網：
<http://twstudy.ncl.edu.tw/>
國立中央圖書館台灣分館台灣學研究中心：
<http://www.ntl.edu.tw/taiwan.tw/home.php?MainPageID=1>
國史館：<http://www.drnh.gov.tw/>
國史館台灣文獻館：<http://www.th.gov.tw/>

台中國書館舊報紙資訊網:<http://paper.ntl.gov.tw/>
檔案管理局全國檔案目錄查詢網:
<http://near.archives.gov.tw/main.htm>
台灣歷史文化地圖:<http://thcts.ascc.net/>
・政府「公報」の画像資料システム
總統府公報影像系統:
<http://lis.ly.gov.tw/lcgci/ttsweb?@0:0:1:presidentdb@0.6414865460618263>
立法院法律系統:<http://lis.ly.gov.tw/lcgci/lglaw>
國民政府時期立法院公報影像系統:
<http://lis.ly.gov.tw/lcgci/ttswebq1?@0:0:1:/disk1/qr/bookold!NOT}XYZ@0.613218825222307>
立法院公報影像系統:
<http://lis.ly.gov.tw/lcgci/ttswebq?@0:0:1:/disk1/qr/booktracy!NOT}XYZ@0.8596576925192441>
臺灣省政府公報網際網路查詢系統:
<http://www.tpg.gov.tw/b-info/info-og.htm>
國家圖書館政府公報查詢系統:
http://twinfo.ncl.edu.tw/tiqry/hypage.cgi?HYPAGE=search/search_sim.hpg&dtid=12&g=1

程) 報告題目:「李登輝總統における大陸政策の組織過程: 辜汪会見を事例として」。報告者 森田健嗣(東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程) 報告題目:「戦後台湾山地における「国語教育」の展開(1945-1954)」

毎回の参加者は10名前後で、参加者の顔ぶれは報告題目のテーマによって異なる。参加者数は多いとは言えないが、活発な討論が行われることもある。ただ第46回の定例研究会は参加者が報告者を含めて5名だったのは残念であった。

この一年間研究会の報告者には大学院生など若手研究者の報告が多かったが、今後は中堅の研究者にも報告していただけるような働きかけもする予定である。

定例研究会(歴史・政治・経済部会)は、原則としてウィークデーの夕方から行うことが多いが、報告者の希望があれば週末の開催もできるので、歴史・政治・経済関係の報告を希望される方は担当理事の張までご連絡ください。

日本台湾学会活動報告

日本台湾学会定例研究会 (歴史・政治・経済部会) 活動状況 担当理事 張士陽(早稲田大学)

2007年7月から2008年7月までの活動状況は以下のとおり。

定例研究会(歴史・政治・経済部会)第44回。
開催日 2007年7月31日午後5時から8時。開催場所: 上智大学2号館10階2-1015a会議室。
報告1 報告者: 羽田哲(海洋政策研究財団) 報告題目:「日台間の漁業の問題点」。報告2 報告者: 黄偉修(早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・院生) 報告題目:「『戒急用忍』政策の決定過程—決定パターンの検討」

定例研究会(歴史・政治・経済部会)第45回。
開催日 2007年10月22日午後7時から9時。開催場所: 明治大学駿河台キャンパス リパティタワー(8階)1089教室。報告者 福田 円(慶応義塾大学政策・メディア研究科後期博士課程) 報告題目:「中国の台湾政策(1962年)—福建省軍事動員の要因と「危機」の回避—」

定例研究会(歴史・政治・経済部会)第46回。
開催日 2008年7月11日。開催場所: 早稲田大学22号館510教室。報告1 報告者 黄偉修(早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士後期課

台北定例研究会

担当幹事 富田哲(台湾・淡江大学)

日本台湾学会台北定例研究会(以下例会)は2007年の学術大会以降、この7月5日におこなった第46回まで計4回開催した(詳細は学会ウェブサイト参照)。この1年の間、運営面では二つの変化があった。

一つ目は開催場所である。2001年8月の第1回例会の会場は台湾大学近くの台湾e店だったが、第2回以降は一部をのぞけば、何義麟氏が勤務する台北教育大学を利用した。何氏には長年負担をかけることになってしまったが、本年3月の第45回からは、基本的には張文薫氏が勤務する台湾大学で開催することになった。

もう一つは企画にあたる世話人の顔ぶれである。これまで、何義麟、張文薫、陳培豊(中央研究院)、永吉美幸(台湾国際放送)、李承機(成功大学)の各氏と私の6名だったが、永吉氏が帰国することになった一方、田島真弓(東華大学)、李衣雲(政治大学)、李尚霖(開南大学)の各氏があらたにくわわり、計8名となった。永吉氏は、例会の案内の送付や問い合わせへの対応などにあたっていたが、今後は田島氏が引き継ぐことになった。

この4回の記録を見ると参加者は平均で13.5人である。参加者の背景を一般化することは難しいが、日本から台湾の大学院に留学している方々

がよくいらっしゃっているのが一つの特色とは言えそうである。台湾研究にたずさわる人々がそれぞれの領域をこえて集まり、議論や交流を深めることがこの例会の大きな目的であると私は理解しているが、今後もしも若手の研究者にそうした有意義な空間を提供していくことができると考えている。

私は、2003年3月発行のニュースレター第6号に例会にかんする文章を執筆したことがある。このなかで「報告者の研究分野のバランスがうまくとれているとは必ずしも言えない」という意見が当時の世話人のあいだで出ていることを紹介したが、これは現在でも解決できていないように感じる。最近では、具体的には経済・人類・政治分野の報告が相対的に少なくなっている。これは、世話人のなかでこれらの分野の研究者が少ないことも関係があろう。ただ、このままではどうしても例会としての方向性がせばまってしまうかたない。われわれとしてもこの方面の研究者に例会に来ていただくべく、積極的に努力していかなければならぬ。

第46回例会の参加体験記(学会サイト参照)に市川智生氏(総合地球環境学研究所)も書いておられるが、この例会では使用言語の選択も重要な問題である。もっとも、明確な「言語政策」があるわけではなく、原則として報告者とコメントーにおまかせすることになっている。そして全体での議論の際にも、言語が臨機応変に使い分けられているような状態である。さしあたりこれ以上の解決策もないように思うが、いずれの言語を使って議論するのかということは、この例会の存在意義にもかかわってくることであるので、今後とも敏感であり続けなければならない。

例会の案内は学会サイトに掲示するとともに、個別にもお送りしている。メールでの連絡を希望される方は、アドレスを私までお知らせいただければと思う(lihotomita@hotmail.com)。報告をしていただけるといふ方も、私もしくは世話人のいずれかに連絡をいただければさいわいである。また、例会にもぜひ気軽にご参加いただきたい。

『日本台湾学会報』について 担当理事 松金公正(宇都宮大学)

『日本台湾学会報』第10号を2008年5月に発行した。目次は以下の通り。

【論説】

- ・「愛郷心」と「愛国心」の交錯—1930年代前半台湾における郷土教育運動をめぐって 許佩賢
 - ・1950年代初期台湾の中国化—「改造」と「中央化」の影響を中心に 菅野敦志
 - ・1950年代台湾における「失学民衆」への「国語」補習教育—元「日本人」の「中国化」の挫折 森田健嗣
 - ・アメリカの許容下での「大陸反攻」の追求—国府の雲南省反攻拠点化計画の構想と挫折 石川誠人
 - ・ローバー号事件の解決過程について 羽根次郎
 - ・李登輝総統の大陸政策決定過程—「戒急用忍」を事例として 黄偉修
 - ・懸賞当選作としての「パパイヤのある街」—『改造』懸賞創作と植民地(文壇) 和泉司
 - ・王白淵の東京留学について 唐顯芸
 - ・翁鬧を読み直す—「懸爺さん」の語りの実験をめぐって 黄毓婷
- 【講演】
- ・現代台湾における族群概念の含意と起源 王甫昌(翻訳 田上智宜)

『日本台湾学会報』第11号から編集体制が変更され、編集委員会が設置されることとなった。編集委員は以下の通り。

松金公正(委員長、宇都宮大学)、松田康博(副委員長、東京大学)、伊藤信悟(みずほ総研)、上水流久彦(県立広島大学)、河原功(成蹊学園)、駒込武(京都大学)、松田京子(南山大学)

学会運営関連報告

担当理事 佐藤幸人(アジア経済研究所)

I. 【第5期理事会 理事会第2回会議議事録】 (抄)

日時 2008年5月31日(土)

場所 東大駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム3

1. 川上理事より第10回学術大会予算案の説明があった。
2. 川上理事より2007年度決算および2008年度予算の説明があった。
3. 佐藤理事より学会報の販売価格の改定の提案があり、提案通り承認された。
4. 佐藤理事より「編集委員会設置規則(案)」が提案され、提案通り承認された。
5. 佐藤理事より運営組織の変更案が示された。

6. 新しい会計監査として菅野敦志を推薦することが承認された。
7. 佐藤理事より第10回会員総会の議案が提案され、一部修正を経て、承認された。
8. 佐藤理事より規約の改正案が示され、提案通り承認された。

II. 【第5期理事会常任理事会第4回会議事録】
(抄)

日時 2008年7月5日(土)

場所 東大駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム2

1. 春山理事長より、記念講演に関して、その後の対応や新聞での報道について報告があった。
2. 松金編集委員長より、5月31日昼に編集委員会を開催し、編集委員のメンバーを確定したことが報告された。
3. 若林実行委員長より、第10回大会の反省点が報告され、それに対して今後の取り組みが議論された。また、川上委員より、大会会計の中間報告があった。
4. 第11回学術大会の分科会企画・自由論題報告の募集要項案が提出され、若干の修正を経て承認された。
5. 『日本台湾学会報』第11号の「投稿要項」案が提出され、若干の修正を経て承認された。
6. 学会報の今後のあり方について松金委員長より問題提起があり、審議された。
7. 名簿の作成について、個人情報保護に関する対応として、ホームページで名簿作成を告知し、非掲載事項、変更事項のある会員は事務局に通知するよう求めることになった。
8. 財政状況について川上理事より説明があり、支出の抑制、収入の増加が必要であることが指摘された。
9. 10名の入会(うち2名は夫婦会員)と2名の退会が承認された。

III. 【第10回大会総会議事録】(抄)

日時 2008年6月1日(日) 午前12:10~12:30

場所 東大駒場キャンパス 18号館1階ホール

司会: 湊照宏(学術振興会)

議長: 大橋英夫(専修大学)

書記: 萩原豪(立教大学)

1. 議長選出
2. 理事会報告。会員総数 460 名(学生 110 一般 340 名)となり、設立時と比べてほぼ倍増したことが報告された。

3. 各業務の状況報告。松田康博目録担当理事より、2008年3月末で7659件を登録済みであることが報告された。川上桃子会計財務担当理事より、会費の納入状況(5月30日)が報告された。それによると、457名中280名が会費を納入している。納入比率は60%。うち学生会員は65%。

関東、関西、台北の定例研究会の活動状況が報告された。

4. 魚住悦子会計監査より、昨年度決算が適正であることを認めるとの報告がなされた。
5. 規約の改正が提案通り承認された。
6. 2007年度決算と2008年度予算が提案通り承認された。
7. 理事会より新しい会計監査として早稲田大学の菅野敦志会員が推薦され、拍手で承認された。
8. 次期選挙の選挙管理委員として、菅原慶乃委員長、北波道子委員、浅野豊美委員が拍手で承認された。
9. 来年6月6日開催予定の第11回大会の山口守実行委員長(日本大学文理学部)より挨拶があった。
10. 企画委員長会の黄英哲委員長より、来年の大会の企画募集の呼びかけがあった。

・今号よりニュースレターの編集を担当することになりました。以後、ご協力をよろしくお願い申し上げます。
・ニュースレターでは、学会等への参加記、台湾研究関連情報、科研や民間助成に基づく共同研究の紹介記事を募集しております。どしどしお寄せください。(前田)

日本台湾学会ニュースレター 第15号

発行：日本台湾学会（代表 春山明哲）

発行年月：2008年10月

〔日本台湾学会事務局〕

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学教養学部18号館923 若林研究室気付

FAX:03-5454-6416

E-mail: nihontaiwangakkai@ask.c.u-tokyo.ac.jp

〔ニュースレター発行事務局〕

〒739-8525 広島県東広島市鏡山1-2-1

広島大学大学院社会科学部 前田研究室気付

TEL:082-424-7205(代) FAX:082-424-7212(共通)

E-mail: jats-newsletter@hiroshima-u.ac.jp